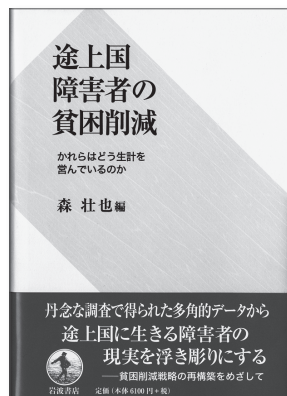


森 壮也 編

## 『途上国障害者の貧困削減 ―かれらはどう生計を営んでいるか』

岩波書店



最終目標年まであと数年と迫ったミレニアム開発目標の八つのターゲットには、よく知られているように女性や子供といった開発の世界で脆弱な人達として知られている人達に関わる課題が含まれている。しかし、二〇〇〇年のこの目標設定時に国連でも世界サミットでも忘れられていた貧困層の中の三割を占めると言われる人達がいる。それが障害者である。

ミレニアム開発目標が採択された翌年、国連総会でメキシコ大統領は開発の問題として、障害の問題に世界が取り組むことの必要性を訴え、それに賛同した世界は、わずか五年後の二〇〇六年に障害者権利条約を採択した。さらに世界の障害当事者団体の大きな期待と精力的な後押しを背景に、国連の条約としては画期的なことに二年で発効に至った同条約の第三二条は締約国の国際協力における障害の包摂について述べている。そしてその直前の第三一条は統計および資料の収集についての章である。先進国、途上国を問わず、条約締約国の障害関連政策立案・実施の基本は、他の多くの政策同様、一に

も二にも障害統計である。しかしながら、国連ESCAPをはじめとして多くの場で問題となっているのは、この障害統計のあまりの不備である。多くの途上国で

障害者の把握すらきちんと行われていない。その結果、障害者の総人口に対する比率は、アジア太平洋地域に限っても、クック諸島の〇・七%、マレーシアの一%から、ニュージーランドやオーストラリアの二〇%まで様々な数値が各国政府から発表されている (UNESCO, Disability at a Glance 2009: a Profile of 36 Countries and Areas in Asia and the Pacific)。その背景には、障害の定義が各国様々であることや捕捉率にかなりのばらつきがあることなどがある。そして何よりこうした統計の整備が障害分野で遅れてきたのは、この分野がこれまで開発の中で周縁化されてきたことにその原因があると思われる。しかし、障害の定義の問題で逡巡しているうちに、貧困削減の問題から障害の問題はどんどん置いてけぼりを食うことになりかねない。このままでは、ミレニアム開発目標に乗り遅れ

たように、再び障害者が貧困者の中の貧困者として取り残されるという愚を世界は犯しかねない。

こうした問題意識を受けてアジア経済研究所が二〇〇七年から二〇〇八年にかけて世界に先駆ける形で取り組んだ課題「障害者の貧困削減―開発途上国の障害者の生計」の研究成果をベースとした出版物が本書である。こうした開発途上国における障害統計の問題全般についての序章に始まり、中国、フィリピン、インドネシア、ベトナム、マレーシア、タイ、コートジボワールといった国々について既存の障害統計の吟味と、各国の実際の障害当事者の生計の実態把握を、現地における丹念なインタビュー調査などで試みた各章からなっている。開発研究者、地域研究者、障害研究者がそれぞれが四つに組んで、障害についての伝統的な見方である「障害の医学・個人モデル」ではなく、障害学からの新たな枠組みである「障害の社会モデル」を共通のフレームワークとして分析に取り組んだ。なかでもフィリピンについては、アジア経済研究所が現地の開発研究所PIIDSと組んで障害当事者を調査員として採用した世界でも例のない障害調査を実施した成果の分析が掲載されている。

本書の分析全体から得られたのは、「生計を営む主体としての障害者」の具体像である。障害者は決して、支援や福祉の受け手という単なる受け身の存在ではない。特に政府財政にゆとりがない開発途上国では、政府からの福祉の支援を当てにすることはできない

い。家族や地域のコミュニティからの助力を得ることはあるにせよ、障害者たちは必死に自力で生計を営んでいる。彼ら障害者の経済生活を営む力、稼働能力は筆者たちの想像以上のものがあつた。それと同時に、そうした能力を拡大し、高めるための支援、またエンパワメントのあり方にはもっと工夫の余地があることもわかってきた。本書の分析を踏まえて、障害者の持つケイパビリティ発揮のための望ましい政策のあり方を探る必要がある。

本書に触れることで、開発における障害のメインストーリーミングへの道筋が少しでも見えてくれば、また貧困削減戦略の新たな方向性が見えてくれば、それは編者として本望である。開発関係者・国際協力関係者が本書を手に取り、障害という今まで耳慣れなかった分野に目を留め、開発のあり方、国際協力のあり方を、現地のデータと現実の問題に則して考え直していただけたら望外の幸せである。

(もり そつや／アジア経済研究所 貧困削減・社会開発研究グループ)